

親鸞仏教センター主任研究員定例講座
「『歎異抄』思想の解明」第Ⅱ期・第5回（通算第12回）

第二章 「ただ念仏」の仏道——「先師口伝」の伝承（1）

加来 雄之

【第二章本文】

ニ オノノ十^ニ余ケ国ノ サカヒヲコエテ 身命ヲカヘリミスシテ タツネキタラシメタマフ 御^{オン}コ、ロサシ ヒトヘニ 往生極楽ノ ミチヲトヒ キカンカタメナリ シカルニ 念仏ヨリホカニ 往生ノミチヲモ存知シ マタ法文等ヲモ シリタルラント コ、ロニク、 オホシメシテ オハシマシテハンヘランハ オホキナル アヤマリナリ モシシカラハ 南都北嶺ニモ ユ、シキ学生タチ オホク座セラレテ サフラウナレハ カノヒトニモ アヒタテマツリテ 往生ノ要 ヨクノキカルヘキナリ 親鸞ニオキテハ タ、念仏シテ 弥陀ニタスケラレ マヒラスヘシト ヨキヒトノ オホセヲ カフリテ 信スルホカニ 別ノ子細ナキナリ 念仏ハ マコトニ 浄土ニムマル、タネニテヤハンヘラン マタ地獄ニオツヘキ業ニテヤ ハンヘルラン 総シテモテ 存知セサルナリ タトヒ法然聖人ニ スカサレ マヒラセテ 念仏シテ 地獄ニオチタリトモ サラニ 後悔スヘカラス サフラウ ソノユヘハ 自余ノ行モハケミテ 仏ニナルヘカリケル身^ミカ 念仏ヲマフシテ 地獄ニモオチテ サフラハ、コソ スカサレ タテマテトイフ 後悔モサフラハメ イツレノ行モ オヨヒカタキ 身ナレハ トテモ地獄ハ 一定 スミカソカシ 弥陀ノ本願 マコトニオハシマサハ 釈尊ノ説教 虚言ナルヘカラス 仏説マコトニオハシマサハ 善導ノ御釈 虚言シタマフ ヘカラス 善導ノ御釈 マコトナラハ 法然ノオホセ ソラコトナランヤ 法然ノオホセ マコトナラハ 親鸞カ マフスムネ マタモテ ムナシカルヘカラス サフラウ^カ 詮^{セン}スルトコロ 愚身ノ信心ニ オキテハ カクノコトシ コノウヘハ 念仏ヲトリテ 信シタテマツラントモ マタステントモ面々ノ御ハカラヒナリト [云々]

【訳にかかわる校訂】（蓮如本の特徴）

おのおのの——おのおの

たねにてやはんべらん——たねにてやはんべるらん

第二章 原文・先人訳

□ は本文にはないが安良岡が補ったと思われる箇所。下線は、訳として検討したい箇所。

蓮如書写本第二章 (ただし段落と番号①～⑬は加来が便宜的に分けた)	第二章口訳 (安良岡康作『歎異抄全講読』大蔵出版、1990年、71－73頁) (ただし □ 記号と傍線は加来が補った。)
二 一 ①おのおの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御《おん》こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。 ②しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。 ③もししからば、南都・北嶺にもゆゑしき学匠たち、おほく座せられてさふらうなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。 ④親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。 ⑤念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。 ⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。 ⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身《み》が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。 ⑧弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。	(第二章) 一 ①おのおの方が、十以上もの国境〈くにざかい〉を越えて、わが身・わが命を思い返さないで、〔私を〕お尋ねにおいてになりました、〔その〕ご意向は、いちずに、極樂に往生する手だてを問い尋ねようとするためであります ②ところが、念仏より外〈ほか〉に、往生の手だてを心得ており、また、往生のための教を書いた文章などを知っているであろうと、私に関心を持って知りたいと思ひになっておいでになりますならば、〔それは〕大きなまちがいです。 ③もしそう〔お思い〕ならば、奈良の都や比叡山にも、すばらしい学僧たちが数多くおいでになりますそうですから、<u>それらの人々にも</u>お逢い申し上げて、極樂に往生するための大事なことを、念を入れてお尋ねになるのがよいのです。 ④〔この〕親鸞においては、ひたすら念仏をとなえて、阿弥陀如来のお助けをこうむるのがよいという、<u>すぐれた人のお言葉を身に受けて</u>、〔それを〕信ずる以外には、各別の理由はないのです。 ⑤念仏を申すことは、ほんとうに、〔極樂〕浄土に〔往って〕生れる<u>因〈もと〉</u>なのでございましょうか、あるいは、地獄に<u>堕ちる</u>はずのしわざなのでございましょうか、全然、〔私は〕<u>心得ておりません</u>。 ⑥〔私としましては、〕たとい、法然聖人におだましをこうむって、念仏したことで地獄に堕ちてしまったとしても、決して後悔するはずはございません。 ⑦そのわけは、〔念仏〕以外の修行に精進・努力して仏に成ることができた<u>私が</u>、念仏を申して、〔そのため、〕地獄にも<u>堕ちます</u>のならば、それこそ、おだましをこうむって堕ちてしまったのだという後悔もございましょうが、しかし、どのような修行にも達し難い私なのですから、結局のところ、地獄は<u>きっと</u>堕ちてとどまる所なのですぞ。 ⑧弥陀の本願が真実であらせられるならば、釈尊のご説教が<u>偽り言</u>のはずがありません。

⑨仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。 ⑩善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。 ⑪法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟《か》。 ⑫詮《せん》ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。 ⑬このうへは、念仏をとりて信じてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと[云々]。	⑨釈尊のご説教が真実であらせられますならば、善導大師の御解釈が<u>偽り言</u>を言われるはずはありません。 ⑩善導の御解釈が真実ならば、法然聖人のお言葉が、どうして<u>偽り言</u>でありましょうか。 ⑪その法然聖人のお言葉が真実ならば、この親鸞が申します趣旨も、同じように、<u>根拠のないはずは</u>ございませんよ。 ⑫結局のところ、この愚かな<u>私</u>の信心においては、このようなものです。 ⑬こう申し上げたからには、念仏を採用してお信じ致そうとも、あるいは捨てようとも、皆さん各自のお考え次第です。……
--	---

前回までのふりかえり

第Ⅰ期では、『歎異抄』をさまざまな誤解から解放し、現代における思想的可能性を新たに切り拓くという課題を見出すために「漢文序」をていねいに読みました。『歎異抄』とは、「先師口伝の真信」と表現される宗教言説が見失われていることを歎き、その本質と力を回復する使命を、先師法然聖人の口伝の真信を相続することを課題にされた親鸞聖人その人の仰せ（物語）に学ぶことで果たし遂げようとする著述でした。

この度の第Ⅱ期では、『歎異抄』の本文の第一章から第二章を拝読しています。この三章は、先人によって法然聖人の仰せを受けとめた親鸞聖人の安心（あんじん）を表わす訓（おし）えとして位置づけられており、『歎異抄』思想を解き明していくための原点となります。

第一章は、親鸞聖人が相続した法然聖人の「先師口伝の真信」の仏道を端的に標示しています。私たちは、いつもこの第一章に示された先師口伝の仏道理解に立ちかえりながら『歎異抄』に学んでいきたいと思えます。

この度の第二章は、親鸞聖人自身がその法然聖人の「先師口伝の真信」の仏道を相続していくときの姿勢を感銘深く伝えています。また第一章で示された仏道の根源が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という「よきひとのおおせ」として表現されています。

I 第二章について

（１）第二章の概要

・第二章は、漢文序で「先師口伝」として確かめられた事実を、親鸞聖人自身がその源空聖人の仏道を相続していく姿勢を表白し、私たちの聞法の姿勢についてラディカルに問いかける物語です。つまり浄土真宗という仏道において師の教えを聞くことの意義が確かめられます。「先師口伝の真信」は、宗教的伝統（マコトとオホセ）に由来することが示されるのです。

・第二章を「先師口伝之真信に異なることを歎く」という視点からみると、とくに「先師口伝」ということが「真信」にもつ意義を回復するための師訓と位置づけることができなす。つまり浄土真宗という宗教的伝統において、真信（宗教的目覚め）に対して先師口伝（師の教え）とはどのような意味を有するかが明らかにされるのです。さらにその先師口伝の根拠が「マコト」「オホセ」として示される。

・金子大栄の『歎異抄』第二章についての有名な言葉、「宗教とは生涯を尽くして悔ゆることのない一句の言葉との出会いである」（取意）という受けとめは、第二章の「先師口伝の真信」

についての役割をよくあらわしています。

┌門弟たちの先師口伝の受けとめについての確かめ（問い直し）
└親鸞自身の先師口伝の受けとめの表明

（２） 第二章の位置

(1) 了祥は第二章を「唯信専称」、あるいは「法の深信」をあきらかにする章として位置づけています。

第一章…唯信の仏道

第二章…唯信の仏道の伝承…「唯信専称」…法の深信

第三章…唯信の仏道の機 …「唯信正因」…機の深信

(2) 第一章から第二章へ

「『歎異抄』の第一章は阿弥陀の本願に対する信についての根本原理を述べています。これは信の宣言なのです。第二章では信というものが体験されそれが人に伝達されるときの問題が扱われます。…中略…かくして本章は親鸞による阿弥陀の信についての弁明と、この信が仏教の伝統とどうかかわっているかを説くものです。第二章は、つまり、親鸞がどこに立っているかを主体的に述べるものなのです。」（アルフレッド・ブルーム『現代思想と歎異抄』五二頁）

（３） 第二章の物語の背景

(1) 第二章が物語られる背景についての諸見解。『歎異抄』の語り方。

日蓮の念仏批判「四箇格言」（念仏無間）か、善鸞事件か。

(2) 善鸞（慈信）事件 親鸞の長子・慈信房善鸞（生没年不詳 親鸞三十歳ころの子か）の言説をめぐる事件。この事件が、親鸞にも、そして関東の門弟たちにも、「師口伝」を根底から問い直させる縁となった。

「善鸞さまが、在まらずば、かくも如来大悲の、しんしんと、親鸞さまに、しみとおらず」（榎本栄一）

【資料】善鸞（慈信）にかかわる消息類

A 善鸞宛三通

- (1) 「九、二 慈信 親鸞」「ふみかきてまいらせそうろう」（『御消息広本』第十通）
- (2) 「一一、九 慈信 親鸞」「九月七日の御ふみ」（『御消息広本』第十一通）
- (3) 「建長八 五、二九 慈信 在判」「おおせられたる事」（『御消息拾遺』善鸞義絶状）

B 善鸞の問題について宛名を挙げるもの二通

- (1) 「建長七 一、九 真浄 親鸞」「さては念仏のあいだのこと」「慈信坊がもうしことによりて、ひとびとの日ごろの信のたじろきおうておわしましそうろうも、詮ずるところは、ひとびとの信心のまことならぬことのあらわれてそうろう。よきことにてそうろう。」（『御消息広本』第十二通）聖典五七七頁）
- (2) 「建長八 五、二九 性信 親鸞」「この御ふみどもの様」（『血脈文集』第二通）

（４） 第二章の構成

(1) 妙音院了祥『歎異抄聞記』

○唯信専修二

初、嘆聞法懇志一 各十余カ国①

二、激発専修信二

初、解偏頗疑懐一 シカルニ②③

二、示真伝正意二

初、略示念仏深信一 親鸞ニオキテハ④

二、広示念仏信相二

初、示還愚 念仏ハマコトニ⑤

二、示信師二

初、示自信一 タトヒ法然⑥

二、示教人信一

初、示師説不虛 弥陀ノ本願⑧～⑩

二、例自説不虛 法然ノオホセ⑪

三、結勧 詮スルトコロ⑫⑬

(2) 安良岡康作『歎異抄全講読』は四段落に分ける。（「念仏」に注目して）

（１）「各々…」①～④ はるばるおいでになって、お尋ねになる極楽往生の道は、すぐれた人のお言葉を受けて、念仏する以外にはない、私の信心。

（２）「念仏は、まことに浄土に…」⑤～⑦ いかなる行も及び難い私にとり、たとひ地獄に落ちて後悔はしない、法然上人のお言葉を信じての念仏の行。

（３）「弥陀の本願まこと…」⑧～⑫ 弥陀・釈尊・善導・法然と伝えられてきた、真実なる往生の道を受けた、根拠ある、私の申し上げる趣旨。

（４）「詮ずるところ…」⑬ 以上申し上げた私の信心に対し、各自のお考えにより、どのように取捨してもかまわない、念仏の行。

(3) 加来案（「〔先〕師口伝」に注目して）

（１）「おのおの十余ヶ国の～」①～③

「師〔親鸞〕口伝」に期待した門弟たちへの親鸞の対応。

（２）「親鸞におきては～」③～⑦

「先師〔源空〕口伝」に対する親鸞自身の受け止めの開頭。

（３）「弥陀の本願～」⑧～⑪

「口伝の真信」の根拠となる本願の歴史を示す。「弥陀ノ本願マコト」から始まる師教の歴史。

（４）「このうえは～」⑫⑬

「師口伝」は、弟子の往生を保証するようなものではなく、弟子の主体的選び（真信）を呼び起こす。

（５）第十二章との関係 異義 学問と救済、宗教における信仰と理性の問題

近角常観によれば、第二章の師訓は、第十二章の異義と対応している。

「経釈をよみ学せざるともがら往生不定のよしのこと、この条すこぶる不足言の義といひつべし。他力真実のむねをあかせるもろもろの正教は、本願を信じ念仏をもうさば仏になる、そのほかはなんの学問かは往生の要なるべきや」（蓮如『歎異抄』第十二章、『聖典』六三一頁。）

II 本文読解

二

第二章の構造はさまざまな視点が成り立つが、私は「先師口伝」について「おのおのの」と「親鸞におきては」とが対比的に語られているとみたい。つまり（１）①～③と（２）④～において、門弟たちが師親鸞の「師口伝」に期待したことと、親鸞が師法然の「師口伝」（ヨキヒトノオホセ）に与えられた目覚めとの差異が対比されて印象深く語られるものとして受けとめたいのです。

①おのおのの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御《おん》こころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。

一、「おのおのの」

・「おのおの」とはどのような人々か。

覚信のエピソード。「そもそも、覚信坊の事ことにあわれにおぼえ、またとうとくもおぼえ候う。そのゆえは、信心たがわずしておわられて候う。またたびたび、信心ぞんじのよういかようにかと、たびたびもうし候いしかば、当時までは、たがうべくも候わず。いよいよ信心のようはつよくぞんずるよし候いき。のぼり候いしに、くにをたちてひとといちともうししとき、やみいだして候いしかども、同行たちはかえれなんともうし候いしかども、「死するほどのことならば、かえるとも死し、とどまるとも死し候わんず。また、やまいはやみ候わば、かえるともやみ、とどまるともやみ候わんず。おなじくは、みもとにてこそおわり候わばおわり候わめとぞんじて、まいりて候うなり」と、御ものがたり候いしなり。この御信心まことにめでたくおぼえ候う。善導和尚の『釈』（散善義）の二河の譬喩におもいあわせられて、よにめでたくぞんじ、うらやましく候うなり。おわりのとき、「南無阿弥陀仏、南無無碍光如来、南無不可思議光如来」と、となえられて、てをくみてしずかにおわられて候いしなり。また、おくれさきだつためしは、あわれになげかくおぼしめされ候うとも、さきだちて滅度にいたり候いぬれば、かならず最初引接のちかいをおこして、結縁・眷属・朋友をみちびくことにて候うなれば、しかるべくおなじ法文の門にいりて候えば、蓮位もたのもしくおぼえ候う。また、おやとなりことなるも、先世のちぎりともうし候えば、たのもしくおぼしめさるべく候うなり。このあわれさ、とうとさ、もうしつくしがたく候えば、とどめ候いぬ。いかにしてかみずからこのことをもうし候うべきや。くわしくはななおもうし候うべく候う。このふみのようを、御まえにて、あしくもや候うとて、よみあげて候えば、「これに過ぐべくも候わず、めでたく候う」と、おおせをかぶりて候うなり。ことに、覚信坊のところに、御なみだをながさせたまいて候うなり。よにあわれにおもわせたまいて候うなり。」（『聖典』五八七頁）

一、「十余ヶ国のさかひをこえて」

・関東から京に至るまで、東海道でいえば、常陸・下総・武蔵・相模・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・伊勢・近江・山城の十二ヶ国の国境を経る。

一、「身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御こころざし ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり」

・「身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御こころざし」、またその「御こころざし」の内容を「ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり」と押さえた意味は何か。

「御ころざし」と第十章の「信をひとつにして心を当来の報土にかけしともがら」という表現との関係について。

「往生極楽のみち」が、④から⑦における「浄土にむまるるたね」という表現や、とくに「地獄におちたり」という表現と対応をなしているのではないか。

・「往生極楽のみち」という表現に託された意味は何か。

「往生極楽のみち」と「ごせのたすからんずるえん」・「しやうじいづべきみち」（『恵信尼消息』『浄典全二』一〇三一頁）

「往生極楽」と「願生浄土」

・「ひとへに……とひきかん」……門弟たちが師親鸞の口から問い訊こうとしこと、「口伝」に期待したことは何であったのか。

②しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、
こゝろにくくおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。

一、「しかるに」……ここは逆接の意。次の「もししかれば」との対比。

一、「念仏よりほかに往生のみちをも存知しまた法文等をもしりたるらんと」

└往生のみちをも存知し……行的関心

念仏よりほかに└

└また法文等をしりたるらん……知的関心

一、「こころにくくおぼしめしてはんべらんはおおきなるあやまりなり」

「こころにくし」は、対象がはっきりしなくて、不満に思いながらも、強く関心をそそられるようす。[憎し]は悪意ではなく、「にくらしくなるくらい、すばらしい」という、魅力を褒め称える気持ちを表す。①奥ゆかしい。心が引かれる。上品で美しい。②恐ろしい。気がかりだ。③怪しい。いぶかしい。

「おおきなるあやまり」は、「先師口伝の真信」にとって、枝末的な過失ではなく、根本的で重大な誤謬であることを示すのであろう。

③もししからば、南都・北嶺にもゆゑしき学匠たち、おほく座せられてさふらうなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

一、「もししからば」

一、「南都北嶺にも」

・南都は京都から見て南に位置する奈良のことで、その南都にある六宗、とくに興福寺を指すのであろう。それに対比し、京都の北の嶺にある延暦寺を指し示す。

一、「ゆゆきしき学生たち、おほく座せられてさふらうなれば、かのひとにもあひたてまつりて」

「ゆゆし+き」 ゆゆし：並大抵ではない。一通りではない。格別な。すばらしい。

「学生」は、異本では「学匠」となっているものもあり、比叡山や南都などの諸大寺で学問や修行を専門にする僧のこと。『教行信証』では「諸寺の釈門」と呼ばれる存在。

校訂「学生〔蓮〕—学匠〔谷〕」

・これらの「学生」は、源空・親鸞、そして「おのおの」にとってどのような存在か。

- ・「学生たち」と「かのひと」

一、「往生の要よくよくきかるべきなり」

- ・「往生のみち」と「往生の要」。

「経釈をよみ学せざるともがら往生不定のよしのこと、この条すこぶる不足言の義といひつべし。他力真実のむねをあかせるもろもろの正教は、本願を信じ念仏をもうさば仏になる、そのほかはなんの学問かは往生の要なるべきや」（『歎異抄』第十二章、『聖典』頁）

- ・「念仏よりほか」の「往生の要」への関心ならば「南都北嶺にもゆゆしき学生たち」によく訊くのがよい。

=====

④親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。

一、「親鸞におきては、」

- ・「親鸞におきては」という名告りをともなう言明
- ・「親鸞におきては」「親鸞は」と「親鸞も」

一、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

・親鸞が信じた「よきひとのおほせ」の本質とはなにか——何でもあった比叡山になかったただ一つのこと。——「ただ」の衝撃

「ただ後世の事は、よき人にもあしきにも、おなじやうに、しやうじいづべきみちをば、ただ一すぢにおほせられ候しを」（『恵信尼消息』（『浄典全二』一〇三一頁）

- ・「しやうじいづべきみち」＝「念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」
- ・「ただ」とはどのような思想か。

「あれもこれも」と「あれか、これか」

「他力本願念仏宗」と「一向専修念仏宗」

「念仏」という行も「弥陀にたすけられる」という救いもすでに比叡山には存在した。なんでもある比叡山になかったもの、それが「ただ」という選択の精神である。比叡山の仏教は、あれもこれもの仏教である。法然の仏教は、あれかこれかの仏教である。

山の念仏は「念仏も」

里の念仏は「念仏しか」

法然の念仏は「ただ念仏」

・この「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の一句には、「よきひとのおおせをかふりて信ずる」つまり「先師口伝」の内容がよくあらわされている。「先師口伝」とは「よきひとのおほせ」である。それは一般的に考えられる「口伝」とはまったく異なった質をもった宗教言説観に立っている。

- ・「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

┌専修念仏

└唯称仏号

「「唯信抄」というのは、「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというところなり。」（『聖典』五四七頁）

「唯」は、ただこのことひとつという。

ふたつならぶことをきらうことばなり。

また「唯」は、ひとりというところなり。

「一つには、一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるが故に」（善導『散善義』『聖典』二一七頁）

「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚どんの身になして、尼入道の無ちのともがらに同して、ちしゃのふるまいをせずして、只一こうに念仏すべし。」

（『一枚起請文』『聖典』九六二頁）

・「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩（ただよく常に如来の名号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし、といへり）」（「正信念仏偈」『聖典』二〇五頁）

・「極重悪人唯称仏（極重の悪人は、ただ仏を称すべし）」（「正信念仏偈」『聖典』二〇七頁）

・曾我量深は「「ただ」とは一向専修である。一向専修とは、定散自力を否定して、ただただ本願に順ずる、順彼仏願故である。人間の理知のはからい一切を捨てて本願念仏に帰する」（『聴記』真宗文庫、一一七頁）

・金子大栄は、この「ただ」が「念仏して」にかかるのか、「と信じて」にかかるのか、という問いを出している。「ただ念仏のみぞまこと」という言葉が後述にあり、また親鸞のであった法然の教えが専修念仏であったことの決定的な意義を考えると念仏にかかるとう理解するのが適当であろう。

・「ただ念仏して」とある念仏は、第一章において「念仏もうさんと思ひ立つ心の起こるとき」という念仏である。法然は、学文して念のこころを称名念仏とは、口で発音することではなく、名にかなうことであり、名をたたえ、名にかなうことであり、つまり存在の不思議さを開示する根源語、如来からのよびかけを表現することである。

・この一句の「ただ」にこそ親鸞の感動がある。ここには選択本願という法蔵菩薩の精神への呼応がある。

一、「とよきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」

先師 —— よきひとの

口伝 —— おほせをかぶりて

真信 —— 信ずるほかに別の子細なきなり

・「よきひとのおほせを信ずる」のではなく、「よきひとのおほせをかぶりて信ずる」というあり方。

・「真信」は「おほせをかぶりて信ずる」と表現されるような質をもつ。対象的論理と場所的論理。

・安良岡は「よきひと」について「仏道における、すぐれて立派な人のこと」（安良岡『全講読』77頁）と解し、「具体的には、先師法然上人のことであるから、善知識・知識（「序」に既出）の意味にも解されるが、それは、この語の語義としては拡張し過ぎてはいないかと思われる」（安良岡『全講読』七八頁）と指摘している。

『資料』

「(二) 一 この御文どもの様、くわしくみそうろう。また、さては慈信が法文の様ゆえに、常陸・下野の人々、念仏もうさせたまひそうろうことの、としごろうけたまわりたる様にはみなかわりおうておわしますときこえそうろう。かえすがえす、こころうくあさましくおぼえ候う。としごろ往生を一定とおおせられそうろう人々、慈信とおなじ様にそらごとをみなそうらいけるを、としごろふかくたのみまいらせてそうらいけること、かえすがえすあさましうそうろう。そのゆえは、往生の信心ともうすことは、一念もうたがうことのそうらわぬをこそ、往生一定とおもいてそうらえ。光明寺の和尚の、信の様をおしえさせたまひそうろうには、「まことの信をさだめられてのちには、弥陀のごとくの仏、釈迦のごとくの仏、そらにみちみちて、釈迦のおしえ、弥陀の本願はひがごととなりとおおせらるとも、一念もうたがいあるべからず」とこそうけたまわりてそうらえば、その様をこそ、としごろもうしてそうろうに、慈信ほどのもののもうすことに、常陸・下野の念仏者のみな御こころどものうかれて、はては、さしもたしかなる証文を、ちからをつくしてかずあまたかきてまいらせてそうらえば、それをみなすておうておわしましそうろうときこえそうらえば、ともかくももうすにおよばずそうろう。まず、慈信がもうしそうろう法文の様、名目もきかず、いわんや、ならいたることもそうらわねば、慈信にひそかにおしうべき様もそうらわず。また、よるもひるも慈信一人に、人にはかくして法文おしえたることそうらわず。〔中略〕弥陀の本願をすてまいらせてそうろうことに、人々のつきて、親鸞をもそらごともうしたるものになしてそうろう。こころうく、うたてきことにそうろう。おおかたには、『唯信抄』・『自力他力の文』・『後世ものがたりのききがき』・『一念多念の証文』・『唯信鈔の文意』・『一念多念の文意』、これらを御覧じながら、慈信が法文によりて、おおくの念仏者達の、弥陀の本願をすてまいらせおうてそうらはんこと、もうすばかりもなくそうらえば、かよの御ふみども、これよりのちにはおおせらるべからずそうろう。…中略…このふみを人々にもみせさせたまうべし。あなかしこ、あなかしこ。 / 五月廿九日 / 親鸞 / 性信房御返事」

(『血脈文集』『聖典』五九六～五九七頁)

「一枚起請文 / 源空述

もろこし、我がちょうに、もろもろの智者達のさたし申さるる觀念の念にも非ず。又、学文をして念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ、往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申し、疑いなく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい候わず。但、三心四修と申す事の候うは、皆、決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠り候う也。此外にはおくふかき事を存せば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚どんの身になして、尼入道の無ちのともがらに同して、ちしゃのふるまいをせずして、只一こうに念仏すべし。

為証以両手印

浄土宗の安心起行、此一紙に至極せり。源空が所存、此外に全く別義を存せず。滅後の邪義をふせがなが為めに、所存を記し畢。

建暦二年正月二十三日 / 源空(花押)」

(『一枚起請文』『聖典』九六二頁)